

# 中村春二編『明治天皇御製百首』

——翻刻と解題——

鈴木 亮

## 【解題】

明治四十五年七月三十日、明治天皇が崩御遊ばされ、大日本歌道奨励会編『明治余光』（大日本歌道奨励会、大正元年八月）を其の嚆矢として、数多の明治天皇御製集（謹解）が刊行せられた。<sup>1)</sup> 中でも、明治天皇の御製を広く江湖に普及せしむべく、御製の中から百首を撰び、主に「御製百首」と題された小冊子の出版が流行した。試みに大正期に刊行せられた「御製百首」を次に掲げてみる。崩御の年には七冊、それ以降も断続的に刊行せられてをり、明治天皇の大御心を偲び奉る人々の如何に多かつたかが窺へよう。<sup>2)</sup>

小林芳次郎編『御製百首』私立高輪淑女学校、大正元年八月※

佐藤半山編『学生用いろは別明治聖帝御製百首』快進社、大正元年九月※

西脇静編『明治天皇御製帖』松邑三松堂、大正元年十月※

斎藤良次郎著『明治天皇御百首』大阪毎日新聞社、大正元年十二月

中村春堂編『明治天皇御製百首』辰文館、大正元年十二月※

彌富濱雄編『御製花の蔭』伊勢崎銀行、大正元年十二月

酒井歌彦編『明治天皇御聖徳百首』三雅堂、大正元年十二月※

小山善太郎編『御製一人百首』警醒社書店、大正二年一月※

大日本皇道実行会編『明治天皇御製百首』大日本皇道実行会出版部、大正四年七月※

大正四年七月※

中村春二編『明治天皇御製百首』成蹊学園出版部、大正八年六月

高久貞義選『明治天皇御集暗誦百首』国民新聞社、大正十二年二月

『明治天皇御製百首』常盤会、大正十二年七月※

小森玄一郎著・岡田玉翠画『明治天皇御製百首聖訓書帖』聖光会、大正十五年五月※

大正十五年五月※

これらは三十頁程の小冊子が多いためか、大半は国立国会図書館に所蔵せられる（所蔵が確認出来るものには「※」を附した）もの、然程伝本は多くない。伝記の備はる編者としては、僅かに書家西脇静（呉石。明治十二年～昭和四十五年）、書家中村春堂（梅

太郎。慶応四年（昭和三十五年）、国文学者彌富濱雄（破摩雄、實水。明治十一年（昭和二十三年）、そして中村春二（枯林。明治十年（大正十三年））を数へるくらゐであらう。

こたび、此処に翻刻紹介する『明治天皇御製百首』の編者中村春二は、成蹊学園創立者である。従つて、教育者として世に語られることが一般的であるのだが、国文学者歌人中村秋香（天保十二年（明治四十三年。祖父は漢学者山梨福川、外祖父は国学者松木直秀）の男として生れ、東京帝国大学文科大学国文学科を卒業し、紀行文『旅ころも』（晴光館、明治四十年八月）、唐詩選の口語訳『唐詩選ぬきは』（成蹊学園出版部、大正十一年十一月）、方丈記の口語訳『口訳方丈記』（成蹊学園出版部、大正十二年十月）、歌集『権の一もと』（渋谷光長編、中村春二遺稿刊行会、昭和三年九月）等の文学的著作があることを考へるに、文学者中村春二の業績を等閑視することは出来ない。<sup>5)</sup>

成蹊実務学校に学んだ川瀬一馬<sup>6)</sup>は、自著『方丈記』（講談社文庫、昭和四十六年七月）の「序」に於て、

私は、中学生の頃から、方丈記の全文をそらんじている。そして、私が学んだ成蹊学園の恩師、園長中村春二先生は、大正十二年九月一日の関東大震災の直後、流布本方丈記による口訳<sup>7)</sup>を印行して私どもに与えられた。方丈記の簡単な注解はもとより、単行の活版本さえ殆どない状態であつたその頃、口語訳本

（しかも新しく画いた五枚の挿絵を加えてある。）に恵まれ、中学生の私にとつて方丈記は、一層親しいものとなつた。この半世紀以前の先生の口語訳は、かねて先生が「かながき」を主張しておられたゆえもあつて、今取り出してみても、新鮮で、甚だ敬意を表すべき内容である。勿論、私が現在ここで意図する現代語訳とはやり方が違うけれど、今度口語訳をこころみ、他のどの訳解よりも参考になつた。

と記し、春二の著した『口訳方丈記』を絶讃してゐる。<sup>7)</sup>春二の基底には、かうした文学的素養のあつたことを諒解しておかなければならないだらう。

中村春二編『明治天皇御製百首』は、春二の高等師範学校附属学校尋常中学校の同級生にして、学園の財政的援助者の一人であつた成蹊学園理事今村繁三（明治十年（昭和三十一年）の四十三歳（数へ）の誕生日を記念して、大正八年一月成蹊の児童生徒用に編まれたものである。春二の「はしがき」に其の事情が記されるも、奥附はない。同年六月「はしがき」を削除し新たに奥附を印刷した形で一般に頒布せられた。秋田県立図書館（大正八年六月初版）、県立長野図書館（大正十年二月三版）、架蔵（大正十三年四月五版）及び成蹊学園史料館（初版（奥附なし）二冊、五版一冊）にしか所蔵が確認出来ず、可なり稀少な文献であると言ひ得る。翻刻に当り、五版（架蔵）を底本として用ゐるが、これは初版（奥附なし）本に

は誤植が散見せられるためである。

収録せられるところの百首、『百人一首』に倣つてか詞書を缺くが、『類纂新輯明治天皇御集』（明治神宮、平成二年十一月）の項目別分類に従へば、

- (一) 神祇 六首
  - (二) 皇室 一首
  - (三) 邦国 八首
  - (四) 軍事 一首
  - (五) 人倫 十一首
  - (六) 精神 六首
  - (七) 典教 十一首
  - (八) 人事 二首
  - (九) 器物 六首
  - (一〇) 時令 三首
  - (一一) 天文 二首
  - (一二) 氣象 二首
  - (一三) 地象 五首
  - (一四) 動物 四首
  - (一五) 植物 三首
- 未収録 二十九首

といふ内訳になる。<sup>9)</sup>「邦国」「人倫」「典教」の歌を多く採つてゐるのは、「はしがき」に「日々拝誦してふみわけゆくわが道の葉と仰ぎ来」つた明治天皇の御製百首を「教へ子に配つこと、はなしぬ。」とあるやうに、教育的効果を期待したためであらう。

しかし、此処で注目すべきは、『類纂新輯明治天皇御集』に収録せられてゐない御製が、全体の四分の一以上にもわたる二十九首存するといふことである（扉の「御製」二首「まごゝろを」「言の葉の」を含めると三十一首）。御歌所寄人であつた亡父秋香からの教示<sup>1)</sup>があつたかも知れないが、これ程の数にはならなからう。『類纂新輯明治天皇御集』は、今日、我々が拝し奉ることの出来る明治天皇の御製八千九百三十六首<sup>12)</sup>を収録した、明治天皇御集委員会編『新輯明治天皇御集』（明治神宮、昭和三十九年十一月）を項目別に類纂したものである（御製の総数は変らない）。宮内庁の許可のもと明治神宮によつて編輯作業が行はれた御製集ゆゑ、遺漏が相当数に及ぶとは考へにくい。

それでは、此の百首の撰歌に当り春二は、如何なる文献から御製を求めたのかと言ふことになる訳であるが、明治天皇崩御後間もなく出版せられた大日本歌道奨励会編『明治余光』（大日本歌道奨励会、大正元年八月）を参看してゐる可能性が非常に高い。二十九首の内二十七首が『明治余光』所収歌と一致するのである（二首の出典は未詳）。『明治余光』に就ては、「崩御直後に急いで刊行したためか、単純な疎漏が多い」「現時点で最大歌数を収載する明治神宮の

『新輯明治天皇御集』に掲載されていないものが著しく多い」「『新輯』収載のものと、わずかではあるが言い回し等が異なるものがありある」といふ問題点が夙に指摘せられてゐるも、大正八年「明治天皇御製百首」刊行時に於ては宮内省編『明治天皇御集』(文部省、大正十一年十二月)は未だ上梓せられてをらず、収録する所の御製五百九十三首、当時に於て最大の御製集であつた。<sup>14)</sup>編輯刊行に當つた大日本歌道奨励会は、高崎正風を除く常勤御歌所歌人の大半が評議員、幹事に名を連ね、大正元年には約一万五千人の会員を擁した組織である。<sup>15)</sup>春二が参照したのも宜なるかなと思はれる。『明治余光』参看の実例を示すべく、『明治天皇御製百首』『明治余光』『新輯明治天皇御集』の順に並べて記すと、以下の通りである。

32 積りては払ふが難くなりぬべし塵ばかりなる事とおもへど(明治天皇御製百首)

つもりては払ふか難くなりぬへし塵ばかりなることと思へど(明治余光・百一頁)

つもりては払ふ方なくなりぬべし塵ばかりなることとおもへど(新輯明治天皇御集)

77 くろがねの射し人もあるものをつらぬき通せやまとこゝろを(明治天皇御製百首)

くろ金のまと射し人もあるものをつらぬきとほせやまと心を

7363 (明治余光・六十一頁)

くろがねのまと射し人もあるものをつらぬきとほせ大和だまし

82 広き世に交りながらいかなればせばきは人のこゝろなるらむ

(明治天皇御製百首)

8266 (明治余光・六十九頁)

ひろき世にまじはりながらともすれば狭くなりゆく人こころかな

(新輯明治天皇御集)

32、77のやうな一句に於る表現の違いもあれば、82のやうに可なり大幅な相違も認められる。斯様に『明治天皇御製百首』と『新輯明治天皇御集』との異同は十四箇所確認出来る(但し、82は異同とせず別歌とした)が、其の全てに於て『明治余光』の表現を踏襲したものとなつてゐる。『明治天皇御製百首』にのみ見られる御製二首、表現四箇所があるのも氣にかゝる所であるが、出典は見出し得なかつた。

彌富濱雄編『御製花の蔭』(伊勢崎銀行、大正元年十二月)に就て言へば、『新輯明治天皇御集』未収録の御製は二十一首。「予が師高崎正風翁より、時につけ、折にふれて承りしを、拝写し置ける一卷あり。それを写して贈らむ。」とあとがきにあるやうに、御歌所長

高崎正風より「承りし」御製を「拝写し」たものから百首を撰んだことが分る。この辺りの事情は、『明治天皇御集』編纂に携はつた、御歌所寄人井上通泰も語るところである。

さて 明治天皇の御製が新聞に出て世間に漏れ始めたのは、明治三十七、八年戦役の頃では無かつたか、少くとも此頃から新聞にあらはれる事が俄に多くなつた。これは当時の御歌所長高崎男が漏されたのである。元来 天皇は御製の世に漏れるのを御好み遊ばさざりし由である。これについても一挿話がある。これは故侍従長徳大寺公爵から承つた話であるが、或時 天皇は御製の類々として新聞に出るのをにがにがしく思召されて、高崎男を御召になつて軽く御咎になつた。無論高崎男は龍顔に對し奉らずして、俯伏して奉答するのである上に、カナ聲で御言葉がよく聞えぬから御叱になつて居るのぢやとは気が附かずに「御製を世に漏すといふ事は、世道人心の爲めに非常によい事と存じまして致した事でございます。もし之について御咎があらば正風は切腹して申訳を致します」と申上げて、調子に乗つて手で腹を切るまねをして御覧に入れた。徳大寺公は側で見つて非常にをかしかつたが、笑ふにも笑はれずして大サウこ（つて）まられた。定めて陛下にもおかしくおほしめしたのであらうが、重ねて御咎は無く其儘に遊ばされたといふ事でございます。<sup>16</sup>

高崎正風が御製を弘めるのに一役買つてゐたことが知られる一挿話である。しかし、『御製花の蔭』も亦、『明治余光』に拠つてゐるのである。未収録の二十一首は全て『明治余光』所収歌と一致し（漢字仮名の使ひ分けは問はない）、『明治余光』から順を追つて抜粋した排列となつてゐることからも、それは明らかである。かうしたことから『明治余光』に限らず、宮内省編『明治天皇御集』刊行以前の御製集に就ては、誤り伝へられてゐた御製も数多く存すると考へられ、更なる検討が必要になつて来るだらう。しかし、當時に於ては、これらの歌も御製として位置づけられ多くの國民に奉ぜられてゐたのである。この事實は、げに深く重い。

以上、明治天皇御製集の享受を考察する際の一資料として『明治天皇御製百首』を翻刻紹介する所以である。

なほ『明治天皇御製百首』には、かるたも存し、川瀬一馬は、その歌がるたで遊び、『明治天皇御製百首』に就て「私は今でもその百首を誦じている程である。」と語つてゐる。<sup>17</sup>

#### 註

- 1 在位中に刊行せられた御製集（謹解）としては、『千代のひかり』（國民新聞社、明治三十六年四月）、大町壯編『日月帖』（大日本歌道奨励会、明治四十一年十二月）、池辺義象・彌富濱雄著『御製謹註天津日影』（中島辰文館、明治四十四年一月）の三冊がある。御製集が然程刊行せられなかつたのは、明治天皇

が御製の公表に自重あらせられたためである。「陛下におかれては、御製は遊ばされても、その御一首すら、他へは固より、御信任遊ばした功臣等に対してさへも御示し遊ばされませんでした。」(千葉胤明『明治天皇御製謹話』大日本雄弁会講談社、昭和十三年二月)。千葉胤明は『明治天皇御集』編纂に従事した御歌所寄人。

- 2 大正元年に限つても、『明治余光』以降、手島益雄編『明治天皇御製歌集』(楽園社、八月)、中山速男編『明治天皇御和歌集』(文王堂、八月)、山田孝雄編『玉の御声』(宝文館、九月)、中外商業新報社編『やまとにしき』(中外商業新報社、九月)、渡辺新三郎著『明治天皇御製謹解』(実業之日本社、九月)が刊行せられた(小泉夢三編『明治大正短歌資料大成 第二卷』立命館出版部、昭和十六年三月)。明治天皇崩御後の御製集に關しては、打越孝明『明治天皇崩御と御製(上・下)』(『明治聖徳記念学会紀要』復刊二十五号・復刊二十六号、平成十年十二月・平成十一年四月)に詳しい。
- 3 たとへば、上田祥士・田畑文明『大正自由教育の旗手 実践の中村春二・思想の三浦修吾』(小学館スクウェア、平成十五年四月)、柴田義松監修(DVD)『学問と情熱第三十二巻 中村春二』(紀伊國屋書店、平成十七年二月)など。
- 4 明治三十六年七月卒業。同期には、国語学者亀田次郎(明治九年〜昭和十九年)、国文学者志田義秀(明治九年〜昭和二十一年)らがをり、志田は、成蹊高等学校教授をつとめ、成蹊学園校歌を作詞してゐる。
- 5 藤田尚子「成蹊の文人たち」(『成蹊國文』三十一号、平成十年三月)、拙稿「解説」(鈴木亮編『中村秋香「秋香集 長歌」翻刻と解題』武蔵野書院、平成二十四年九月)、上原作和「創造的批評の史的変遷とその教授法」(『明星大学明星教育センター研究紀要』三号、平成二十五年三月)等で指摘。なほ、春二の歌集は、桜井仁編『中村春二・小波歌集 成蹊学園創立者とその妻の短歌』(羽衣出版、令和四年四月)が刊行せられてゐる。
- 6 成蹊実務学校九回生(大正十一年実務学校廃校決定により成蹊中学校に転籍、大正十四年三月中学校卒業。国文学者、書誌学者。明治三十九年〜平成十一年。
- 7 「参考文献」には、第一に「(口訳) 方丈記 中村春二著 大正十二年刊 成蹊学園出版部」を挙げる。
- 8 「国立国会図書館サーチ」(<https://iss.ndl.go.jp/>)、「GINJI Books 大学図書館の本をさがす」(<https://cinit.ac.jp/books/>)に拠る。初版に於ては、95番歌差し替へのため、(一)神祇 七首、(二三) 地象 四首。
- 10 小林芳次郎編『御製百首』(私立高輪淑女学校、大正元年八月)は、『類纂新編明治天皇御集』未収録の御製が三十五首(巻末「最終の御製」を含めると三十六首)。その内『明治余光』未収録の御製は「いづれをかまことの色とさだめなむ日」ことにかは

るあぢさゐの花」(最終の御製)のみ。

- 11 春二の歌学びは、秋香の薫陶を受けたものである。小島鉦作「中村春二先生略年譜」(成蹊学園編「中村春二先生生誕百年記念」成蹊)の名の由来)成蹊学園、昭和五十二年九月)に拠れば、「明治二十九年(一八九六)二十歳(中略)この頃、家庭において、父に就いて作歌を習う。」秋香は、明治三十年十月二日宮内省御歌所寄人拜命(恒川平一「御歌所の研究」還暦記念出版会、昭和十四年六月)。

- 12 明治天皇の御製は、九万三千三十二首が遺されてゐる(『新輯明治天皇御集』「序」)。宮内省編「明治天皇御集」(文部省、大正十一年十二月)は、一千六百八十七首所収。

- 13 打越孝明「明治天皇崩御と御製(下)」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊二十六号、平成十一年四月)  
14 打越孝明「明治天皇崩御と御製(上)」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊二十五号、平成十年十二月)

- 15 宮本蒼士「御歌会始の詠進制度と明治の国学者」(『御歌所と国学者』弘文堂、平成二十二年十二月)。同書に拠れば、大日本歌道奨励会発足時(明治三十六年)、中村秋香は評議員であつた。大日本歌道奨励会に就ては、松澤俊二「旧派」の行方―大日本歌道奨励会の形成から衰退まで―(『國語と國文學』八十九卷三号、平成二十四年三月)『よむ』こと近代』青弓社、平成二十六年十二月所収)、同「旧派」歌人の出版戦略―大

日本歌道奨励会と幹事大町杜をめぐって―(『和歌文学研究』百十六号、平成三十年六月)、同「大日本歌道奨励会による刊行歌書解題―近代和歌研究への一視点として―」(『人間文化研究』九号、平成三十年十一月、桃山学院大学総合研究所)に詳しい。

- 16 井上通泰述「明治天皇御集編纂に就て」(教化団体聯合会、昭和二年五月)

- 17 前掲13。井上通泰は、明治天皇崩御後、宮内大臣渡辺千秋より皇太后陛下の思召として、世間に漏れてゐる御製の中には古歌も交つてゐるから十分に調べ、注意するやう伝へられた。御歌所で確認してみると、「之れより先数ヶ月前に△△△△といふ御製集を或会から出版した。我等はまださういもの、出た事も知らなかつたが、其書物が 皇太后陛下の御目にとまつたのである。」(井上通泰「明治天皇御集編纂に就て」前掲16)といふことであつた。この「或会から出版」せられた「△△△△といふ御製集」こそ『明治余光』ではないだらうか。

- 18 成蹊学園史料館所蔵(H/Ⅲ/44)  
19 川瀬一馬編「中村春二先生記念室目録解説」(成蹊学園、昭和六十年七月)

【凡例】

- 一、底本は、架蔵本（大正十三年五版）を用ゐ、一部成蹊学園史料館所蔵初版（奥附なし）本（Ⅱ-1/25a）を参照した。
- 一、仮名遣ひは底本の通りとした。
- 一、漢字、仮名の使ひ分けは底本のまゝである。
- 一、底本に附されてゐる振り仮名は割愛した。
- 一、漢字は概ね通行の字体に統一した。
- 一、私に歌番号を算用数字で頭書した。（『新輯明治天皇御集』には収録せられず『明治余光』に取められてゐる御製は○印、『新輯明治天皇御集』『明治余光』いづれにも収録せられてゐない御製には●印を附した。）
- 一、改頁箇所にては煩雑になるため、特に明示はしなかつた。
- 一、『新輯明治天皇御集』『明治余光』所収歌と異同がある場合には、当該箇所\*印（\*\*印）を附し一首の後に「\*……（御）」「\*……（余）」の形で『新輯明治天皇御集』『明治余光』の表現を記した。但し、漢字仮名の使ひ分け、異体字に関しては、この限りでない。
- 一、初版（奥附なし）との異同は、字句の訂正、排列の変更（99、100番歌の並び替へ）だけにとゞまるのだが、95番歌が差し替へられてゐるため、初版の御製を「」（初版）で示した。

【書誌】

- 判型 新書判（縦十八・二種、横十・三種）
- 装訂 平綴 一冊 茶色表紙
- 外題 「明治天皇御製百首」（中央）
- 頁数 二十四頁。「御製」、「はしがき」（初版以降削除せられてをり、翻刻に当り初版（奥附なし）本で補つた。）には頁数の記載なし。一頁五首（二行二十字詰のため一首は二行書きとなる）。

○架蔵

【翻刻】

御製

○まご、ろを限りなき世にとゝむるはやまとことばのいさをなりけり

●言の葉の上にはほひてゆかしきは人のこゝろの花にぞありける

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまのみち

はしがき

明治天皇陛下の御製洩れ承りし折々かきしるしおきし百首、いづれもめでたくかしく、日々拝誦してふみわけゆくわが道の業と仰ぎ来れるが、今年本学園賛助員今村繁三殿の第四拾参回誕辰祝賀日の記念として特に刷り、教へ子に配つことゝはなしぬ。

大正八年一月二十三日 成蹊学園 中村春二

〔鈴木註：初版以降「はしがき」は削除〕

明治天皇御製百首

- 1 あづさ弓八洲の外もなみ風のしづかなる世の年立ちにけり
- 2 ○春雨の長閑なる日になりにけりやなぎも萌えん梅もかをらむ
- 3 ○限りなき大海原の波のうへにたなびき渡る春がすみかな
- 4 このごろは垣根の柳軒の梅皆うぐひすの宿となりぬる
- 5 朝な朝なかならず来鳴く鶯をき、もらしけり事しげくして
- 6 つかさ人さゝぐる書は多かれど花見るほどのひまはありけり

- 7 菅の根の長き春日はなか／＼に物におこたる人ぞおほかる
- 8 ○桜鯛つりする海人の声ばかりかすみへのこる春の海ばら
- 9 おのがじ、務ををへて後にこそ花の蔭には立つべかりけれ \*し(御)
- 10 ○花時を葉しといひて訪はざりし谷のさくらも若葉さしけり
- 11 ○たらちねの御親の御代の旧事を思ひぞいづる庭のたちばな
- 12 とのゐ人語らふこゑも絶えはて、更けゆく夜半に水鶏なくな
- 13 ○寄る波にうち上げられて伏しながら花さきにけり河原撫子
- 14 ○はらはすは思はぬ方に傾かむ露おきあまるなでしこの花
- 15 風わたる木かけをかよふ小車のとまれば蟬のこゑきこゆなり
- 16 庭の面に清水の音はきこゆれどむすぶいとまもなき今年かな
- 17 ○星の飛ぶ影のみみえて夏の夜も更けゆく空は淋しかりけり
- 18 年々におもひやれども山水を汲みて遊ばん夏なかりけり
- 19 ○ぬば玉の夢に再びむすびけりすゝしかりつる松の下水
- 20 窓の中に扇とりてもあつき日に照る日をうけて小草かるみゆ
- 21 まつりごといで、聴くまはかくばかり暑き日なりと思はざりしを
- 22 暑しともいはれざりけり煮えかへる水田に立てる賤をおもへば
- 23 萩の戸の花にやどれる月かげは賤がかき根もへだてざるらむ \*露(御)
- 24 ○有明の月もさし入る窓の戸に影さへみえて鳴くきりぎりす
- 25 ○秋の夜の長くなるこそうれしけれ見る卷々の数をつくして
- 26 ○冬深き闇のふすまを重ねてもおもふは賤が夜寒なりけり
- 27 海原はみどりにはれて浜松のこずゑさやかにふれる白雪
- 28 月白く冴えたる庭とおもひしは隈なく雪の降れるなりけり

- 29 ○梅の花咲けるを見ればふる雪に冬ごもる身のはづかしきかな
- 30 更くる夜の霜ふむ人もあるものを火桶にのみやよりあかすべき
- 31 浅みどり澄みわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな
- 32 積りては払ふが難くなりぬべし塵ばかりなる事とおもへど \*方なく(御)
- 33 大空にそびえてみゆる高嶺にもほればのぼる道はありけり
- 34 器には随ひながらいはほをもとほすは水の力なりけり \*いはがねも(御)
- 35 ●五十鈴川清きながれの末汲みてこゝろを洗へあきつしま人
- 36 さゞれ石の巖とならむ末までも五十鈴の川の水はにこらじ
- 37 苑守やひとりみるらむ昔わがあつめし庭の秋草のはな
- 38 子らは皆いくさのにはいではて、おきなや一人山田守るらむ
- 39 山の奥鳥の果てまでたづね見む世に知られざる人もありやと
- 40 末遂にならざらめやは国の為民の為にと朕がおもふこと
- 41 世の中は尊き卑しきほどく身に身をつくすこそ務なりけれ
- 42 夏の夜も寢覚めがちにぞ明かしける世の為思ふこと多くして \*て(御)
- 43 ○千歳にはあらずともよし常磐なる松のみさをにならひてしがな
- 44 ○雨だりにくぼみし軒の石見てもかたき業とて思ひすてめや
- 45 ふむ人はあまたあれども言の葉の道の高根は誰れかこゆらむ
- 46 花になり実になる見れば草も木もなべて務はある世なりけり \*の(御)
- 47 雲の上に立ち栄えたる山松の高きにならへ人のこゝろも
- 48 ○雪にたへ嵐にたへし後にこそ松のくらゐも高くみえけれ
- 49 ○天地も動かすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな
- 50 よりそはむ暇はなくとも文机の上には塵をすゑずもあらなむ

- 51 葦原の国富まさんと思ふにもあをひとくさぞ宝なりける
- 52 白玉を光なしとも思ふかな磨きたらざることを忘れて
- 53 人皆のえらぶが上に選ばれたる玉にもきづの有る世なりけり \*びし(御)
- 54 神葉にかけし鏡をかゝみにて人も心をみがけとぞおもふ
- 55 うち向ふたびに心を磨けとやかゝみは神の造りそめけむ
- 56 己が身を修むる道はまなばなむ賤がなりはひ暇なくとも
- 57 ひとりたつ身となりし子を幼しとおもふや親のこゝろなるらむ
- 58 国の為たふれし人をしてしむにもおもふは親のこゝろなりけり
- 59 思ふこと思ふがまゝにいひいづる幼ごゝろやまことなるらむ
- 60 たらちねの親の教をまもる子はまなびの道もまどはざるらむ
- 61 四方の海皆はらからと思ふ世になど浪風のたちさわぐらむ
- 62 〇過を諫めかはして親しむがまことの友のこゝろなるらむ
- 63 人はたゝまことの道を守らなむ貴き賤しきはありとも \*れども(御)
- 64 並びゆく人にはよしや後るとも正しき道を履みなたがへそ
- 65 〇ともすればかき濁しけり山水の澄ませば澄ます人のこゝろを \*む(余)
- 66 〇思ふには任せずとても人ごゝろたひらかにこそあらまほしけれ \*こと(余)
- 67 事なしとゆるぶ心はなかくに仇あるよりも危かりけり
- 68 しき島のやまと心の雄々しさは事あるときぞあらはれにける
- 69 〇よしあしを人の上にはいひ乍ら身をかへりみる人なかりけり
- 70 易くして為し得難きは世の中の人の人たるおこなひにして
- 71 正しくも生ひ茂らせよ教草をとこ女の道をわかちて
- 72 進みたる世に生れたるうなるにもむかしのことをまづ教へなむ

- 73 たらちねの庭の訓は狭けれどひろき世に立つ基とはなれ \*ぞなる(御)
- 74 ○時はかる器は前にあり乍らたゆみがちなり人のこゝろは \*にのみは(御)
- 75 覆へる事もこそあれ小車の進むのみに任せざらなむ \*にのみは(御)
- 76 心ある人のいさめの言の葉はやまひなき身の葉なりけり
- 77 くるがねの射し人もあるものをつらぬき通せやまどごゝろを \*だましひ(御)
- 78 世はやすく治りぬとて人みなゆるぶ心ぞあだになるべき \*と(御)
- 79 目に見えぬ神の心に通ふこそ人のこゝろの誠なりけれ
- 80 世の中の人に後を取りぬべしす、まむ時に進まざりせば
- 81 ○開けゆく道にいで、も心せよつまづくことのある世なりけり
- 82 ○広き世に交りながらいかなればせきは人のこゝろなるらむ
- 83 思ふこと思ひさだめて後にこそ人にもかくといふべかりけれ
- 84 いその上古き例を温ねつ、新しき世の事もさだめむ
- 85 家富みてあかぬ事なき身なりとも人のつとめをおこたるなゆめ \*に(御)
- 86 ○思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける
- 87 何事も思ふがまゝ、にならざるがかへりて人の身の為にこそ
- 88 天を恨み人を尤むることもあらじわがあやまちを思ひかへさば
- 89 いにしへの書見るたびに思ふかなおのが治むる国はいかにと \*し(余) \*\*ナシ(余)
- 90 ○親も子も親しみかはす家の内のにぎはへるこそ樂しかりけれ
- 91 たらちねの親の心はたれもみな年ふるまゝに思ひ知るらむ
- 92 ○千万の民のこゝろも治まらむまこと一つをもて教へなば
- 93 ●久かたの空に晴れたる富士の根の高きを人のこゝろともがな
- 94 さしのぼる朝日のごとく爽にもたまほしきは心なりけり

95 岩がねをきりとほしても川水はおもふところにながれゆくらむ

〔目にみえぬ神に對ひて愧ぢざるは人のこゝろのまことなりけり〕(初版)

96 もの学ぶ道に立つ子よ怠にまされる仇はなしと知らなむ

97 波風のしづかなる日も船人は楫にこゝろをゆるさざらなむ

98 むらぎもの心の限りつくしてむわが思ふこと成りもならずも

99 千早ぶる神ぞしるらむ民のため世をやすかれと思ふこゝろは

100 とこしへに民安かれと祈るなるわが世をまもれ伊勢の大神

\* 祈る (御)

〔奥附〕

大正八年六月十日 初版発行

大正十三年三月二十五日 五版印刷

大正十三年四月一日 五版発行

定価金拾五銭

編者 中村春二

府下池袋一、二〇一

発行者 厚見純明

東京市本所区北二葉町二十七番地

印刷者 小池善藏

東京市本所区北二葉町二十七番地

印刷所 成蹊学園出版部印刷所

発行所 東京池袋 成蹊学園出版部

振替東京 一三三九二八  
振替名古屋 一〇五二七

附記

- ・資料の閲覧、調査に当り、成蹊学園史料館、秋田県立図書館、県立長野図書館には御高配を賜った。記して感謝申し上げます。
- ・来たる令和六年は、中村春二先生歿後百年の記念すべき年にあたる。

(すずき・りょう 東京都立江北高等学校教諭)